教職実践研究，（9）：1-15（2019）

＜原著論文＞

英語即興ディベートを通した「知性」の育成
―Basic English I における発信型授業の展開において―

天　久　大　輔※

Fostering Intelligence through Impromptu Debate
―Developing an Active Learning Style in a Basic English Class―

Daisuke AMEKU※

要　約

Basic English I において，即興ディベートを取り入れることで，以下３点が明らかになった．

1）相手に伝わりやすい英語を精査し，意見を主張できた．その結果，英語で論理的に物事を考える力を育むことに繋がった．

2）英語学習に取り組んだ結果，様々なディベートのテーマに対し，チーム３人で協働する力を育んだ．

3）話し合いを進める中で様々な意見が生まれ，個々が創造力を駆使し，立論や反論の内容が具体化された．

しかし，実践後のリフレクションなどを有効に活用し，テーマに対する具体的な知識を身につけることが今後の課題である．

キーワード：即興ディベート，知性，英文法，発信型英語力

This paper focused on using teaching style in which students learn actively. The teacher tried to help students apply impromptu debate in a way that leads to improvement in intelligence and the development in English communication. This research shows that as a result of the teaching methodology, students focused on fostering their intelligence and generate their own opinion effectively. However, it is one subject for students to acquire certain knowledge on the various topics by effectively utilizing the reflection after the practice.

Keywords：Impromptu Debate, Intelligence, English Grammar, Communicative Skills in English

1．はじめに

英語指導において，学生の「深い学び」へと繋げるには，学生は物の見方や，考え方を働かせ，創造する能力を引き出すことが不可欠である．単に思ったことを伝えるだけでなく，情報を精査した上で自己の考えを形成し，伝達できるように指導を行わなければ，学生の「深い学び」に繋がっていくことは困難である．鈴木（2018:46-47）は，AIの著しい進化に対応するために，これからの大学におけ

※人文学部国際コミュニケーション学科（Faculty of Humanities, Department of International Communication）

る教養教育において，学生は３つの能力を身につけていく必要性があると述べられた．１つ目に，創造力の育成である．学習者が，幅広い知識を有することを前提に，如何に問題を発見し,解決できる能力である．２つ目に，多様力である．コミュニケーションを通して，他者を理解し導く（リーダーとして）力の必要性があると伝えている．３つ目に，数理力の必要性が挙げられる．論理的に思考し物事を適切に考える力を身につける重要性である．AIが高度な言語処理や，ディープラーニングなどの大量なデータをもとに学習効果を高めることが可能となる現代において，人間として身に付けるべき知性は，AIが持つ知識には代替できないであろうと考える．先に述べた，AIの発達が著しい現代において，英語指導を通し，「深い学び」とは，英語での思考力を活性化することを意味しており，その目的達成に合った英語指導方法の構築が必須である．

２．研究内容

⑴　即興ディベートとは

英語の授業において，英語での思考力を向上させる活動は多く存在する．個々の学生の能力，クラスの人数，また教師が学生の能力を引き出す力など，包括的に捉えた上で，その場に合った授業を展開することが望まれる．そこで，2013年度から文部科学省助成事業において，高等学校における「多様な学習成果の評価手法に関する調査研究」の一環として，即興型英語ディベートを活用した英語指導が高等学校において活発に取り入れられている．中川（2017:2-3）は，即興ディベートで学生が身に付けられる英語力として以下の５つを挙げている．

・英語での発信力
・論理的思考力
・幅広い知識
・プレゼンテーション力
・コミュニケーション力

このように，即興ディベートで身につくと予測される英語力は広範囲になる．つまり，即興ディベートの取り組みによって，統合的に英語力を養うことが可能であり，英語学習者の能力を底上げする指導法として効果的であると捉える．

アカデミックディベートと即興ディベートでは様々な点で異なってくる．まず，アカデミックディベートは，あらかじめ与えられたテーマに対し，データ収集，ディベーターの英語で伝達する内容の練習，反駁へ対する対応策など，事前に万全な体制で準備をすることができる．松本（2009:10-12）は，授業におけるディベートは「考える力（思考力）」を育成し，「総合的な英語コミュニケーションを伸長する」と主張している．これは，本研究において「知性」の一つとして育成されるであろうと予測される英語での「創造力」を向上させる目的と合致している．即興ディベートにおいては取り組み内容の特異性から，受講者の英語での「考える力」（思考力・創造力）を発揚できると考えられる．ここで即興ディベートの流れについて説明する．即興ディベートにおいては，その場でトピックが与えられ，ディベート開始直前の15分間で，肯定もしくは否定の立場での立論を組み立て，相手へ伝えなければならない．筆者自身，本実践研究を行う以前に，沖縄県高等学校英語教育研究会主催による即興ディベートの研修会に参加した．その際に，その場でトピックへ対する内容を考え，英語で相手に伝えることの難しさを感じると同時に，英語での思考力を高めるトレーニングとして不可欠であると痛感した．

さらに，今後求められる学力として，教育課程企画特別部会論点整理（2015:165）においては，21世紀の教育課程を，「知識」，「スキル」，「人間性」，「メタ認知」の４つの能力に分類している．それぞれの能力が相互に関連し，次代に求められるカリキュラム・デザインとして示されている．このデザインは，新学習指導要領（2017:4）の第１章　総則の

第１の３において，以下のように示されているように（表１），学生の育成に必要な資質能力の３つの柱に重なるような授業を構築していくことが今後求められる．

表１　新学習指導要領　第１章　総則
第１の３　資質・能力

(1)　知識及び技能が習得されるようにすること
(2)　思考力，判断力，表現力等を育成すること
(3)　学びに向かう力，人間性等を涵養すること

即興ディベートで身につくと予測される英語力は，上記の表１で示した３つの柱が重要になってくる．この３つの柱は，筆者が即興ディベートを行うことで，学生が身につけられる英語力と関連性を持っている．

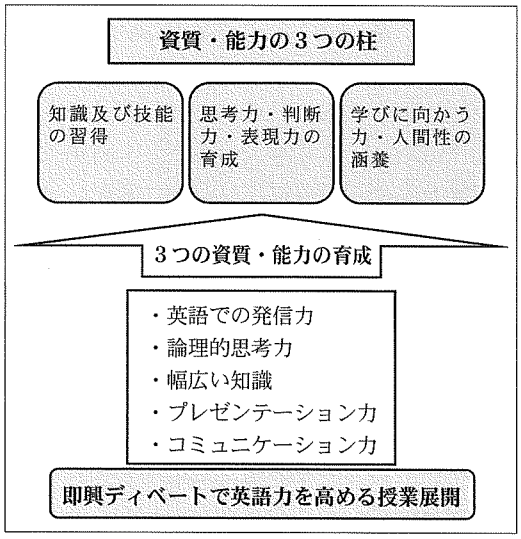

図１　資質・能力と即興ディベートで英語力を高める授業の関連性

図１に示すように，第二言語としての英語の資質・能力向上を狙いとする授業展開が，即興ディベートによって身につく能力と相互に大きく関わっている．英語で思考し，その内容を伝達し，チームとして協働で活動することは，外国語を習得する上で学習者の資質・能力の向上に繋がると考える．知識・技能，思考力・判断力・表現力の向上，さらに社会の様々な諸問題に対し涵養な態度で物事を考えられる英語学習者を育成できるのではないかと捉える．

また，即興ディベートは３人１組で，40～50分以内で完結するため，大学の90分講義において，即興ディベートを有効に活用できるのではないかと考えた．中川（2017）は，PDA方式の即興ディベートの流れを以下のように示している．

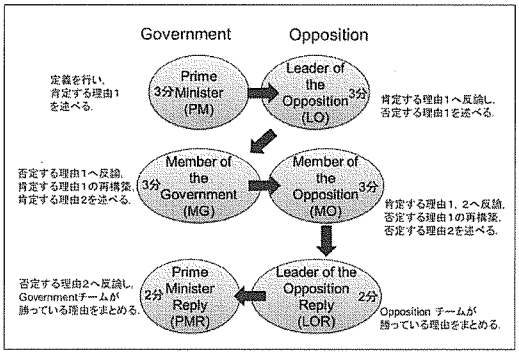

図２　授業でできる即興型英語ディベートより　抜粋

このように,ディベートの流れは,組織的に構築されている．３人１組のグループのそれぞれのメンバーが与えられた役割を遂行し，協働で英語活動を行うという点で，能動的に学び，英語思考力を深められる活動の１つであると考える．

(2)　英語教育における知性とは

英語教育において，学生の総合的英語力（４技能）を底上げするには，先にも述べたように，知識及び技能が習得され，思考力・判断力・表現力等の育成の重要性を述べた．さらに，学びに向かう力，つまり人間性等を涵養することが次代に求められる資質能力として重要である．このように学生に対し求められる資質及び能力は幅広く，長期的かつ学年ごとに計画的に指導していかねばならない．ここでは，本研究テーマである，英語指導を通しての知性の育成について考察していきたい．内田（2011）は，グローバル人材育成の視点から，大学における教養教育の目的として，知識を身につける以前に，知性を活性化するこ

とが不可欠であると述べている．つまり学修者として，何を学ぶ必要があり，将来のために何を知り，得た能力を分類するなど俯瞰的に物事を見定めることのできる力が知性の形であると推察した．

さらに，2018年度大学教育学会において，鈴木（2018:46-47）は，AI研究とは，人間が行う知的活動を人工物で実現しようという研究であり，Deep Blueやコンピュータ棋士の勝利の例などについて，現在著しく発展しているAI研究プロジェクトについて述べた．そして，これからの人工知能の重要な分野である機械学習が，画像処理や音声認識においてさらに発展するであろうと伝えている．AIの著しい進化に対応するための，これからの大学における教養教育には３つの能力を身につけていく必要性があると述べている．先にも述べたが，１つ目に，創造力である.学習者が，幅広い知識を有することを前提に，如何に問題を発見し，解決できる力が必要であると述べた．次に，多様力の必要性である．コミュニケーションを通して，他者を理解し先導する（リーダーとして）力の必要性があると伝えた．３つ目に，数理力である．論理的に思考し，物事を適切に考える力のことだ．この上記の３つの能力がこれからのAI時代における教養教育に必要な能力であると分類した.これは本来の英語力を伸長する上で必要である，知識･技能とは区別して捉えられ，学生の物の見方や考え方を育成することに付随すると推論される．つまり，英語学習においては，創造力，論理的思考力そして多様性のある周りに対しての涵養的態度を育てる意味となるのではないかと考える．

これから，即興ディベートによって習得されると考えられる知性についてさらに深慮していきたい．

(3) 即興ディベートと知性との関連性

前述したように，本研究においては，英語教育に必要な能力としての知性を３つに分類する．その中で，即興ディベートを通してどのように知性を獲得できるかについて考察していきたい．

まず１つ目に，学生は即興ディベートを通し創造力を活性化することが可能である．Bloom（1956:17-19）の批判的思考の６段階モデルを基に改定され，Anderson& Krathwohl（2001:30-31）の６段階モデルでは下から，①記憶，②理解，③応用，④分析，⑤評価，⑥創造,の順で段階的に学びを深め，思考力向上を目指すモデルである．即興ディベートの実践をこのモデルに適合すると，⑥の創造ステージにかけての批判的思考力の向上を目指す上で有効ではないかと考える．実践報告書において，有嶋・田中・鶴田・手島（2009:124-125）は，英語ディベート活動は，批判的思考をあまりしない生徒の批判的思考力を育成するのに効果的な活動であると立証している．即興ディベートの活動において，英語の批判的思考力がさらに支持されるのではないかと考える．具体的には，与えられたテーマに対し，その場で肯定もしくは否定側の定義を定めなければならない．また，様々な意見に対し反論し，反論されたことへ，再度反論するなど，その場に応じて考え，相手に伝えなければならない.そのような点から，瞬時に協働で創造力を働かせることを土台とし，発信型英語力を駆使していくことが必須である．また，鳥飼（2017:89-92）は，英語ディベート教育の意義は批判的思考力を養うことを目的としていると述べていることも含め，英語即興ディベートを授業に取り入れることで，学生の思考力の活性化に繋がり，さらに批判的思考力の高まりが期待される．

２つ目に，即興ディベートを通じ，多様性に富む人間性の育成が可能であると捉える．久保田（2018:163-166）は,コミュニケーション能力と態度の両方を包括的に捉え，越境コミュニケーションの資質として以下に示している.右の図３に示されているように,コミュニケーション態度の育成には，伝え合おうとする意思と相互の歩みよりが不可欠になってくる．

先に述べた多様性に富む人間性とは，他者を理解し，認め合うという視点で捉えている．つまり，チームの仲間及び対戦する相手への尊敬や誠実な態度，つまり他者へ対する汎用的態度を養うには，即興ディベートの実践から得られるのではないかと考える．

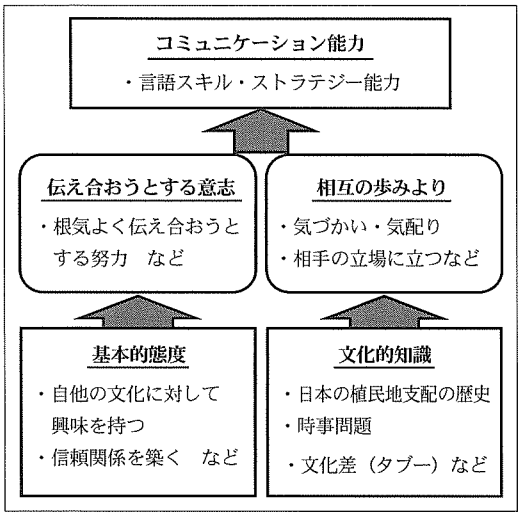

図３　英語教育幻想より　一部抜粋

３つ目に，英語での論理的思考力の育成である．平成28年度文部科学省「総合的な教師力向上のための調査研究事業」における即興ディベートを用いた教員研修プログラムの報告書（2017:3）において，英語の総合的スキルについて論理的思考力は１つの重要な英語力として捉えている．さらに，この論理的思考力を鍛えるためのアクティブラーニングの一形態として，即興型英語ディベートを使った新しい学習方法を十分に指導できる教員が極めて限られているのが現状の問題点であると述べている．上記のことから，筆者も英語指導者として，英語即興ディベートの技法を学び，学生の総合的英語スキル（ここでは英語の論理的思考力）を高めていくことが可能ではないかと考えている．また，本間（2002:34-35，169-178）は，論理的思考力及びコミュニケーション力は，自分から情報発信する場合に，初めて試されるものであり，情報や前提に左右されずに意味を伝える論理的なコミュニケーション力を鍛えるためには，ディベートが役立つと述べている．

(4)　英文法と発信型英語力との関連性

新学習指導要領（2018:144-145）における英語の目標においては，聞くこと，読むこと，話すこと（やり取り），話すこと（発表），書くことの５つの領域に設定された．これはCEFRの指標に照らし合わせた形となり，新たに（やり取り）の能力を育成する領域が加わった．これは，発信型英語力に含まれるスピーキング能力として，発表するだけにとどまらず，他者とのやり取りを通して，コミュニケーション態度を育成する狙いからだと考える．英語でのやり取りは，即興ディベートを行う上で，とても重要な英語力になってくる．チームのそれぞれの役割が相手へ論理的に物事を伝達し，それを理解するという点で，発信型英語力を総合的に捉えると，上記で述べた５領域すべてを含むことになる．しかし，ここでは発信型英語力を大きく２つに分け，英語アウトプットとしてのライティングとスピーキング能力とし，英文法との関わりを考察していく．即興ディベートにおいては，その場で与えられたトピックに対し，限られた時間内で伝達する内容をまとめ，英語で相手に伝えるという点で，英語で正確に書く必要性がある．南条（2018:45-47）は，英語を書き，文章化することは言葉を凝縮し，切れ味の良い簡素なものにして，情報処理の能力を高めると述べている．これは相手へ物事を英語で伝えるという点で，文法力を基にした，文章構成力が不可欠である．また，コミュニケーション能力の構成要素として，Celce-Murcia（2007:41-57）は，以下の５つの領域に分けている．

１．社会的文化能力
２．談話能力
３．言語能力
４．定型表現能力
５．方略的能力

上記の領域において，言語能力には，英文法能力が含まれる．英語でコミュニケーションを行う，つまり発信型英語力には，様々な能力が必要とされるが，ここでは文構造やその他の英語文法能力の知識は不可欠になってくると言える．

(5) 沖縄大学におけるBasic Englishの位置づけ

本学において，Basic English Ⅰは，英語を運用する際の基礎となる文法事項を習得することを目的としている．（シラバスより一部抜粋）英語文法を中心とした講義で，全学科において選択必修科目として位置づけられている．英文法の知識の習得にとどまらず，得た知識を実社会で実用的な英語として使用してもらうことを１つの目標としている講義であることから，アクティブラーニング型の授業を多く取り入れた授業実践が不可欠である．

3．Basic English Ⅰにおける即興ディベートの授業内容

(1) 授業実施日

2018年度前期，「Basic English Ⅰ：03クラス」（毎週火曜日,金曜日の週２回講義：２限目）全30回講義中，８回の講義の後半40分間を以下のスケジュールで即興ディベートを展開した．

表２　ディベートスケジュール

日　程	即興ディベートの内容
５月 11，15，18，22，25，26日 （全６回：各30分）	即興ディベートを行うにあたり，グループでのワークショップを取り入れ,肯定側１，２，３番目・否定側１，２，３番目の役割を全体で共有した.テーマは共通して，“Every student should go to a university in Okinawa.”とした．
６月19日（１回目）	Topic: Japanese food is better than western food for breakfast.
６月22日（２回目）	Topic: A robot dog is better than a real dog.
６月26日（３回目）	Topic: Specialized education from early infancy makes children happier.
６月29日（４回目）	Topic: Space exploration is a waste of money.
７月３日（５回目）	Topic: We should penalize the sports teams for the behavior of their fans.
７月６日（６回目）	Topic: We should introduce eco-tax.
７月10日（７回目）	Topic: Fair trade is unfair.
７月20日（８回目）	Topic: Government should not fund the arts.

(2) 受講生

本学の１年次の学生23名，４年次２名（10名男子　15名女子）の計25名がこのBasic English Ⅰを受講している．１年次の選択必修科目であり，学科別には以下の構成人数である．

表３　学科別　受講生

学　　科	人　数
法経学科	３名
国際コミュニケーション学科	９名
こども文化学科	６名
福祉文化学科	７名

(3) 講義の展開

〔１〕事前学習

１回目の即興ディベートを行う前に，あらかじめ学生には３人１組のグループを構成してもらった．（受講生が25名の為，１グループは４人構成）５月前半の段階で，グループを決めてもらい，１回目から８回目までのディベートのスケジュールを決定した．ディベートを実際に開始するまで１ヵ月の期間があるため，学生が十分に準備できる時間を確保した．また８チーム（３人１組）が２回ディベートを行い，１回目で対戦する相手と２回目で重ならないように調整した．先の図２に示したように，肯定側１～３番目・否定側１～３番目とそれぞれの順番によって伝達する内容が異なってくる．そのことから，肯定側及び否定側のどの役割においても各学生が対応し，即興ディベート全体の流れを確認するために，５月（全６回：各30分）に共通のトピック（Topic: “Every student should go to a university in Okinawa.”）に対してワーク

ショップを行った．事前学習を行うことで，即興ディベートに対しての流れを理解するだけではなく，個々人がリサーチを行い，英語で思考する態度の育成につながったのではないかと感じている．また，実際に即興ディベートでチームとして協働する仲間と，意思疎通を図り，主体的で対話的である，深い学びへとつながる事前学習であった．

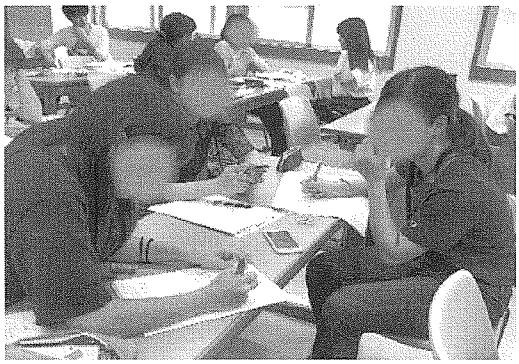

写真１　事前学習で共通のテーマに対しグループワークで取り組む学生の様子

事前学習では，中川（2018:63-74）のスピーチシートを活用した．流れとして，①リサーチを行う（スマートフォンでの情報検索を許可），②英文を組み立て，スピーチシートに記入，③グループにおいて英語で情報を共有した後に，全体での意見交換を行った．活発な議論が行われ，学生は他者の異なる意見に対し，熱心に聞き入っていた．

第１回目のグループワークで，スピーチシートの流れに合わせることで，具体的に英語で内容を書き，論理的に英語で思考し，相手に理解してもらおうと努めた．例えば，英文において，“for example”，や“as a result”等の語句を使用し，大学で学ぶ重要性を丁寧に伝えようとしている箇所がある．しかし，以下のような文法上の誤りが，他のグループにおいても顕著にみられた．

（誤）		（正）
a lot thing	→	a lot of things
many kind	→	many kinds

机間指導の際に，筆者から指摘された文法的誤りなどに対しては，何が間違っているのかについて理解を示しているグループが多かった．これは英語の文法知識はあるものの，英語で書くという作業があまりなされていないことが原因であると感じた．また，筆者が暗示的に問いかけることで，各グループの英語で書く内容の誤りへ対する気づきを促すように努めた．

また，４回目のグループワークにおいて，それぞれのグループは，英語で論理的に書こうと努めることに限らず，段階的ではあるが，英語で書く量も多くなり，活発にグループワークが行われた．そのような中で，否定側のポイント１の立て直しの箇所で，スピーチシートに書かれている内容を以下のように抜粋し示している．

（抜粋文）
Since we are looking for expertise, we don't need to learn a lot.
（専門性を探しているので，大学で多くを学ぶ必要がない）

上記の内容は，否定側の意見であるので，大学へ行き学ぶ必要性がないと主張すべきところであるが，専門性を身に付けるために，４年間の時間を大学で学ぶ必要性がない，と述べられている．筆者の捉え方として，大学という場は専門性を高めることのできる学びの場所として理解している．上記の抜粋文は，概して大学で学ぶ必要がないと英語で記述されているので，具体的な内容（ここでは専門性を身につける上で，４年間大学で学ぶ必要性がない職業など）を述べることで，論理的な内容の構築に繋げられると感じた．つまり，論理的に英語で内容を書こうとしているが，さらに創造性に富んだ内容を書き加えることで，伝える事柄に具体性が生じてくるのではないかという見解である．

以下，その他のスピーチシートに書かれた内容である．

（抜粋文）
It is difficult without borrowing a scholarship.
（奨学金無しでは難しい）

上記の英文は，”without borrowing a scholarship”のような具体的な内容が書かれているが，否定側２番目が最後に相手へ対して主張する場であることから以下の内容が適切な表現であると考える．

“It is difficult to attend a university without borrowing a scholarship.”

下線部の部分を加えることで，グループの主張を明瞭化し，具体的に相手グループへ意見を主張できるのではないかと考える．

上記で提示した内容は，前半部と後半部の一部の内容である．書かれている内容に関しては，先に示したように修正が必要な個所も多々ある．しかし，グループワークを毎回行うことで，書く英語の量は，行う回数に伴い増加した．つまり，それぞれの学生の創造性に育んだ具体的内容が英語で示されるようになったからだと感じている．

〔2〕即興ディベートの実践

上記に示した事前学習後に，講義の後半40～45分間を活用し，即興ディベートを行った．実践では，計８回の即興ディベートで，各チーム２回のディベートを実際に行った．ここでは，実践例とし，１回目と７回目の２つのディベートの内容を考察していく．

また，２チームが即興ディベートを行う際に，他の学生に関しては，３人の学生が主体となり，司会及びタイムキーパーの役割を行ってもらうようにした．残りの学生は，全員が即興ディベートの審査員となってもらった．その目的としては，全員がディベートに集中して聞くことで，伝えようとしている内容の要点を英語で確認することができるためである．実際に学生は，即興ディベートを評価する立場であるため，熱心にディベーターの話す内容に注意を傾けていた．ディベートの評価シートは，北海道大学大学院　経済学研究院のシートを参考に，筆者が一部修正を行い，活用した．

ディベート評価シート

	班名	班名
1．主張に理由があったか.		
2．反論があったか.		
3．例やデータを用い,十分に説明した		
4．質問し,積極的に議論したか.		
5．アイコンタクト,ジェスチャー		
6．話す構成はわかりやすいか.		
7．スピーカーの役割を果たしている.		
合　計		

勝利チーム＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

賛成チームへの評価	反対チームへの評価
改善点	興味深かった内容

北海道大学大学院経済学研究院
ディベート評価シート　一部改訂

上記のディベートシートを活用することで，１～７までの項目に対し，最高点５点～１点に設定し，合計の点数をもとに勝利チームを学生個人で決定してもらった．学生が評価した後に評価シートを回収し，最終的に総合的に勝ったチームを司会者から伝えてもらうようにした．この評価シートでは，下段にそれぞれのチームへ対する評価及び改善点，興味深かった内容を記載する箇所があることから，相手の英語で話す内容へ対し，注意深く聞こうとする姿勢が多くみられた．

ディベート：１回目
Topic: Japanese food is better than western food for breakfast.

１回目の即興ディベートは比較的取り組みやすい内容となっている．15分間の準備時間後，肯定側からのディベートで開始した．以下の内容は，実際に即興ディベートを行った際に学生によって英語で発話された内容を抜粋し，まとめた上で記載している．

肯定側意見

Points: Good nutrition balance / Western food is heavy from morning.

Explanation: Japanese food is full of diverse and fresh foods staff but western food is not very good for your body from the nutritional aspect.　など

否定側意見

Points: You can make early. / Western food is healthy.

Explanation: You should eat salad, fresh juice so you can take a lot of nutrition.
Also, yoghurt and salad are no calorie.
It doesn't take to make western food.など

このように，それぞれの英語で発話された表現には，文法の誤りなどが所々みられる．しかし，事前学習で流れを確認した後の実践ということもあり，英語で論理的に伝えている．また，肯定側は，日本食ではバランスの摂れた食事が可能で，その要因として豊富な食材が日本食には存在すると述べた．否定側は，手軽に栄養を摂取できるのは洋食であることを指摘した．具体例としては，サラダやヨーグルトなどの例を挙げて，肯定側に対して英語で表現し，伝達した．これは，限られた時間内において，グループで協働し，創造力を発揮しようと努めた結果からではないかと推測する．結果として，９対７で否定チームが勝利した．

写真２　第１回目即興ディベートで準備しているグループの様子

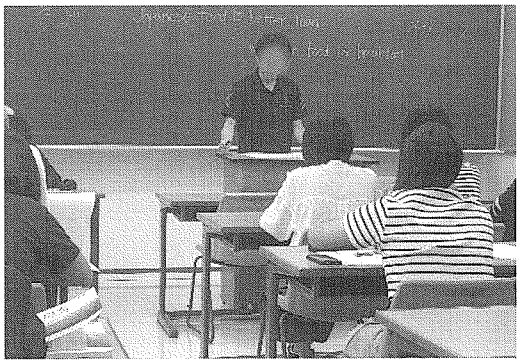

写真３　ディベーターとして発表する学生の様子

ディベートの評価シートからは以下のようなコメントがあった．

（学生の評価シートより抜粋）

賛成チームへの評価

・明確に英語を話し，伝えていたのでとても聞き取りやすかった．
・３人目のディベーターは，まとめとしてデータを引用していたので説得力があった．
・声が大きかった．　など

反対チームへのコメント

・２人目のディベーターが使用している単語がわかりやすく，伝わりやすかった．
・その場で作った反論がうまかった．
・しっかりとまとめられていて，相手の意見を理解した上で反対の意見を述べていた．　など

改善点に対するアドバイス

・両チームとも主張するべきポイント１，２を明確に述べないと，その後の討議が進まなくなると思った．
・その場で反論するのが難しいと思った．
・話を聞きとり，まとめなければ次に進むことさえできず，時間配分が難しそうにみえた．　など

興味深かった内容・その他

・洋食は意外とヘルシーだとわかった．
・洋食をヘルシーだと伝えているのが興味深かった．
・お互い，いっぱいいっぱいで相手の主張をあまり聞きとることに集中できない所もあったかなと思った．　など

第１回目の即興ディベートということもあり，ジャッジをした学生たちは，自身がディベーターとして参加する際に，どうすればよいのかという客観的な視点でジャッジをしている意見が多くあった．

また，トピックに対する，賛成及び反対の評価へ対する意見も様々であった．

ディベート：７回目

Topic: Fair trade is unfair.

今回の即興ディベートの肯定側のチームは，先に述べた２回目のディベート実践の肯定側と同じチームである．それぞれのチームが２回目の実践であることから，グループでの役割分担などが明確化されており，落ち着いて取り組んでいる様子が教室内でみられた．以下は学生が実際にディベートで話した肯定側及び否定側の内容の抜粋である．

肯定側意見

Points: Unfair trading happens. / A few people can buy fair trade good.

Explanation: In the international market, it is paid at 5 dollars for coffee beans but the farmers only receive less than half of When people do fair trade, there are two types. One is to get profit in fair. The other is not to get profit in fair. For this reason, Unfair trade of fair trade makes poor countries more poor. Therefore, Fair trade is unfair.
There are a few people who buy fair trade goods. We believe that the fair trade goods is slightly more expensive than a normal goods. There are people who live a rich life with fair trade while other are living poorly due to fair trade.

上記の内容が肯定側の意見である．それぞれ３名の話した内容を順に並べた．ここで，２回目のディベートと比較すると，英語で話した内容量が多いことにまず気づくであろう．３名で協働してリサーチし，具体的な内容が示されたのではないかと考える．その中には，「フェアトレードではコーヒー豆に５ドル支払われているのにも関わらず，実際に豆を生産している農家の手元には５ドルの半分もない」と表現した．どこの国で，どのくらいのコーヒー豆の量に対して５ドル払っているのかという具体例などが加わると，肯定側の意見をさらに強固にできたと感じられる内容であった．しかし，富裕層と貧困層との間で得る利益が異なるなど，トピックに対してのサポートする内容が多々あった．

否定側意見

Points: Producer can live a stable life. / A difference of the poverty and wealth shrinks.

Explanation: We believe that a stable income is provided. Also, a rotation of the money improves thanks to the fair trade.
The most important point is a difference of the poverty and wealth disappears. Fair trade is connected industrial activation by paying an appropriate wage to a certain worker.

否定側の意見でも，英語で話された内容は多くなった．しかし，肯定側と比較すると具体例に乏しく感じられる．例えば，「安定した給料が支払われる」と伝えているが，実際にそのようにされている国や，その状況などをサポートする内容が必要になってくると感じた．英語で話された表現に関しては，前半で“shrink”の英語を使用し，後半では“disappear”のように言い換えて表現している．これは，英語で論理的に話す際に，同じ語の使用を避けることで，伝える内容を洗練された形で聞き手に伝えようとしていると捉える．

肯定側及び否定側の内容の中で，上記にも示したように，“more poor”（正しくは“poorer”）などの文法的な誤りが所々にみられるが，伝える内容としては全体的に理解可能な内容であったと判断した．結果として，具体例を丁寧に伝えることができた肯定側のチームの勝利であった．

ディベート評価シートの意見は以下のとおりである．(学生の評価シートより抜粋)

賛成チームへの評価

- 具体例あり，比較できてわかりやすかった．
- 伝える内容がスムーズであった．
- データが使われていた．
- 聞き取りやすく，わかりやすかった．
- ジェスチャーを加えるともっと良い．
- １人１人がしっかり役割を果たした．
- 例も用いて，理由もしっかり述べていた．

など

反対チームへの評価

- 発表内容が整っていないのが残念だった．
- 初めから否定を述べ，その後に理由を説明していたので，わかりやすかった．
- 反論するには難しい内容だったけど，しっかり取り組んでいた．
- 単語がわかりやすく，理解しやすかった．

など

改善点に対するアドバイス

- それぞれ伝えている内容はわかったが，発表時間が余っているのでもったいない．
- 顔を上げて話すとよい．
- 反対チームの反論があまり言えていなかったのでそこが言えたらもっと良かった．
- もう少しゆっくり話したら，お互い聞きやすいと感じた．
- 肯定側は相手の意見を聞き取ることにもっと注意したほうがいい．否定側は逆説の表現を上手く利用したほうがよい．
- もっと文を簡単にして伝えた方がよい．

など

興味深かった内容・その他

- 肯定側の「安定しているのは生産者１人だけ」が納得できたし，わかりやすかった．
- 農家の受け取りは半分になるのでフェアなトレードではないと理解した．
- 発展途上国と先進国では格差が生じる．
- フェアトレードは深刻な問題だ．

など

学生からは様々な意見が出された．

その中で，「伝える内容がスムーズであった「例や理由を用いてわかりやすかった」など創造力を働かせ，英語で論理的に相手にわかりやすいように伝えている肯定的な意見があった．また，「１人１人がしっかり役割を果たしていた」との意見からは協働でディベートを行う姿勢の表れであると推測する．

４．アンケート調査結果の考察

(1)　アンケートの調査結果

2018年度前期，「Basic English Ⅰ：03クラス」21名を対象に，前期終了後（８月１週目）に即興ディベートについてのアンケート調査を実施した．なお，前期の即興ディベートに参加しなかった者や，アンケート調査時に欠席した者は，調査結果の対象からは外している．下の表４に示されているのが質問項目である．

表４　即興ディベート実施後のアンケート質問項目

1	即興ディベートを通して，英語の論理的思考力を高めることができましたか.
2	即興ディベートを行い，英語で表現する力が向上しましたか.
3	即興ディベートを行うことで語彙力の向上につながりましたか.
4	即興ディベートを行うことで英文法の向上につながりましたか.
5	即興ディベートを通し，英語で物事を考えようと努力しましたか.
6	即興ディベートを通し，多様性（対人コミュニケーション能力）が身につきましたか.
7	即興ディベートを通して英語での創造力を高めることができましたか.
8	即興ディベートを通して他者と協働することができましたか.
9	即興ディベートを楽しく行うことができました.
10	即興ディベートを行うことで,主体的・対話的で深い学びにつながったか.
11	即興ディベートは総合的に英語力を高めることにつながりましたか.
12	今後も即興ディベートを行いたいですか.

質問項目の内容は，総合的英語力に関する質問が中心となっている．その中で本研究のテーマであるディベートを通しての「知性」の育成に関しての質問項目は，論理的思考力，多様性（協働），創造力の３つの項目に分類し提示した．

⑵　アンケートへ対する考察

即興ディベートの実施後のアンケートでは上記のような結果であった．図４においては，質問項目ごとの比率を示した．全体として，大多数の学生が即興ディベートを通して，総合的に英語力を高めることができたと考えている（質問11）．これは，英語の４技能のすべてを活用し，ディベートを行ったという観点から学生の英語へ対する真剣な取り組みの成果であると考える．

本研究のテーマである，即興ディベートを通し知性を育むという視点から，このアンケートの内容を考察する．筆者が先に述べたように，本研究においては，幅広い意味で捉えられる「知性」を英語指導の中で育んでいく際に，３つの資質・能力として捉えた．それぞれは，「数理力（論理的思考力）」，「創造性」，「多様性」である．表４における質問１

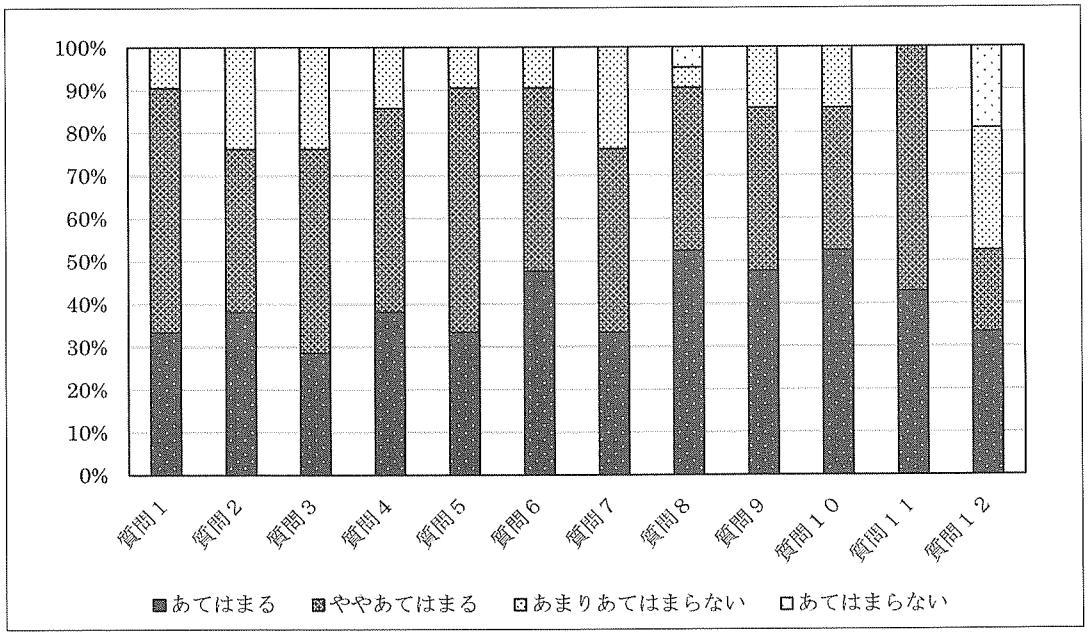

図４　アンケート対象者全体の質問項目ごとの比率

では，「即興ディベートを通して，英語の論理的思考力を高めることができましたか」に対し，「あてはまる」（33％）と「ややあてはまる」（57％）と答えた学生が90％に達したのは予想以上の結果である．理由の１つには，事前学習を通し，時間をかけて論理的に英語で物事を相手に伝える練習を行った成果であると考える．さらに，即興ディベートの事前学習後の実践においては，相手に伝えたい英語を理解してもらうために，ロジカルに物事を捉え，即興ディベートの流れに円滑に適応できたと考える．

次に，英語での「創造性」についてである．アンケートの質問７で，「即興ディベートを通して英語での創造力を高めることができましたか」の質問７に対し，「あてはまる」(33％)と「ややあてはまる」（42％）と答えた学生が75％であった．全体的には概ね達成できたと考えている．創造性を働かせるとうことは，英語での思考を活性化し，相手に伝達することでその考えた事柄を可視化しなければならない．しかし，「あまりあてはまらない」（25％）と考える学生が存在するので，伝達する内容を創造し，その内容を英語化し，相手に伝えるという３つのステップを円滑に進めるためのさらなる工夫が必要である．表４のアンケートとは別に，自由形式で記入できる個別のアンケート項目「チームとして即興ディベートを行う際に改善すべき点は何ですか」の質問では，「もう少し考える時間が必要」，「時間内に文章を作ること」などが多く挙げられた．これは，考える時間が十分にあれば，英語で伝える内容を精査し，さらに創造力を発揮できるのではないかと感じた．

最後に「知性」の１つとしての「多様性」の育成である．表４のアンケート質問８「即興ディベートを通して他者と協働することができましたか」では，「あてはまる」(52％)，「ややあてはまる」（38％）と総合的に90％を占めた．５月から７月にかけて３か月間，チームとして協働して活動した成果の表れであると実感した．

表４のアンケートにおいて，質問４の「即興ディベートを行うことで英文法の向上につながりますか」に対しては，学生から多くの肯定的な意見が返ってきた．個別の自由記入形式アンケートでは，「正しく，わかりやすく英語で表現するために英文法の力がついた」，「英文を作る際に文法を活用するので，向上が見られた」，「既習の文法事項を活用し，アウトプットできるので向上した」などが挙げられた．これは，教師主導の講義形式ではなく，即興ディベートを通し，学生が自立した学習者として活動に取り組んだ成果であると考える．

５．テスト（英検）結果の考察

本学においては１年次の学生に対し，１年間で３回の実用英語検定試験（英検IBA：TEST C）を実施している．テストは1100点満点（Reading:550 / Listening:550）である．３月試験，７月試験のどちらかのテストを受験しなかった学生は，調査結果の対象から外している．下の図５のデータは，2018年度前期，「Basic English Ⅰ：03クラス」の受講者，３月（入学直前）と７月（前期後半）に実施した２回のテストの平均点及び標準偏差の変化である．テストの内容は，１回目，２回目共に同一の内容となっている．つまり，英語力を図るテストとして，本研究テーマであるディベート検証の事前事後で同一テストを実

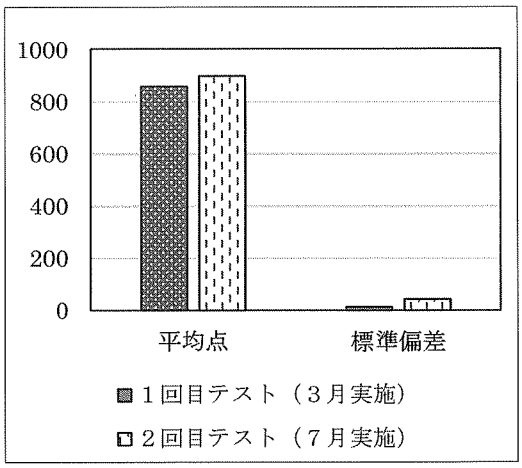

図５　英検　テスト　データ

施していることから，テストの信頼性及び妥当性があると考えられる．

全体的に，１回目のテストに比較すると，７月の２回目のテストにおいて，平均点は高くなっている（+41）．１回目のテストは入学前に受検したテストであることから，試験へ対するモチベーションなどを考えると，正確なテストのデータであるとは断言できない．しかし，７月試験において，全体的に一定の平均点の伸びを示していることから，即興ディベートの実践が少なからず，学生の英語学習へ対する意欲を活性化し，このような結果へと繋がったのではないかと考察する．

しかし，１回目のテストの標準偏差（12.1）に比較すると，７月に行われたテストでの標準偏差（43.2）となっている．平均点は向上しているものの，２回目のテストにおいて点数の統一性が存在していないと判断できる．３回目の英検IBAテストへ向けて，さらなる創意工夫のある講義を展開していく必要がある．

６．成果

・即興ディベートを通し，学生は英語で論理的に思考しようと努めた．その結果，ディベートの実践では，相手に伝わりやすい英語を精査しながら，個々の意見を主張できた．

・様々なディベートのテーマに対し，チーム３人で協働して実践した．事前学習から話し合いを深めることで，異なる学科の学生が１つになり，英語学習に取り組んだ．

・チームで話し合いを進める中で，様々な意見が生まれ，立論や反論の内容が具体化された．個々人が創造力を駆使し，出された内容をチームでまとめ，即興ディベートの実践が円滑に進められた．

・Basic English I の科目は英文法中心のクラスであるが，得た知識を実社会で実用的な英語として使用してもらうことを１つの目標としている講義であることから，即興ディベートを取り入れた授業実践を行ってきた．その結果，英文法の向上に繋がり，学生の英語学習へ対する前向きな姿勢を感じ取ることができた．

７．今後の課題

・特に１学年の学生にとっては，全体的に英語運用能力の底上げが不可欠である．その達成のためには，継続して基礎的な英語力を高め，発展的に英語学習を行っていかなければならない．

・即興ディベートの実践では，限られた時間内に立論，反論，結論などを英語で述べる特異性がある英語学習である．そのことから情報を素早く収集し，英語で伝えられるような学習効果を高められる授業の工夫が今後必要である．

・即興ディベートの実践後，それぞれのテーマに対する具体的な内容の理解に欠けているのではないかと感じた．これは,実践後のリフレクションなどを有効に活用し，テーマに対する具体的な知識を身につけられる授業のさらなる工夫が不可欠である．後期の授業において，即興ディベートで活用した８つのテーマに対して，パラグラフライティング等の課題を与え，時間をかけて具体的にディベートでテーマにした内容を深く理解し，学生の深い学びへと繋げていきたい．

【付　記】

Basic English I の講義は１学年で他学科の学生同士が英語学習へ対し切磋琢磨できる場であると考える．そのよう場において，毎回の講義において熱心に学習に取り組んだ学生に感謝の意を示すとともに，これかも学生の英語力の底上げのために真摯に指導に取り組む決意である．

〈参考・引用文献〉

１）有嶋宏一・田中瑞穂・鶴田美里絵・手島今日子（2009）第22回研究助成　B.実践部門　報告Ⅳ　「高校生の英語ディベー

ト活動は英語スピーキング能力と批判的思考力を伸ばすか」公益財団法人日本英語検定協会，pp.124-125
2）Anderson, L.W. and Krathwohl, D.R.,et al (Eds.) (2001) A Taxonomy for Learning, Teaching, and Assessing: A Revision of Bloom's Taxonomy of Educational Objectives. Allyn & Bacon., MA (Pearson Education Group), pp.27-37
3）文部科学省（2015）教育課程企画特別部会論点整理 参考資料P.165
4）久保田竜子（2018）英語教育幻想　ちくま新書，pp.163-166
5）Celce-Murcia, M. (2007) Rethinking the role of communicative competence in language teaching. In E. Alcon Soler & M.P. Safont Jordan (Eds.), Intercultural language use and language learning. Heidelberg, Germany: Springer Netherlands. pp.41-57
6）中川智皓（2017）即興型英語ディベートを用いた教員の研修プログラムの開発・実施　平成28年度　成果報告書　パーラメンタリーディベート人材育成協会（PDA）P3
7）鈴木健嗣（2018）大学教育学会第40回大会発表要旨収録，pp.46-47
8）鳥飼玖美子（2017）　話すための英語講談社現代新書，pp.89-92
9）中川智皓（2017）授業でできる即興型英語ディベート一般社団法人　パーラメンタリーディベート人材育成協会（PDA），pp.2-3
10）前掲書，pp.63-74
11）南条竹則（2018）英語とは何か　インターナショナル新書，pp.45-47
12）松本茂（2009）「『授業ディベート』のすすめ－思考力と表現力の育成」．「英語教育」７月号第58巻４号，pp.10-12．東京：大修館書店．
13）Bloom,B.S.and Krathwohl,D.R. (1956) Taxonomy of Educational Objectives: The Classification of Educational goals,by a committee of college and university examiners.Handbook 1: Cognitive Domain. NY, NY: Longmans, Green, pp.10-24
14）本間正人（2002）英語で鍛えるロジカルシンキング！日経BP社，pp.34-35
15）前掲書，pp.169-178
16）文部科学省（2018）　中学校学習指導要領（平成29年告示）東山書房，pp.144-145

〈参考・引用ウェブページ〉

1）内田樹（2011）『追手門大学講演録』http://blog.tatsuru.com/（2018/6/7）
2）北海道大学大学院経済学研究院　ディベート評価シート http://www.econ.hokudai.ac.jp/~hasimoto/Debate%20Evaluation%20Sheet%202008revised.pdf（2018/8/16）